

第61回 それぞれの思いを込め 時代を映した芸名

2019年のNHK大河ドラマ『いだてん』の語り手役として登場する、昭和の落語名人・五代目古今亭志ん生は16回以上も改名を繰り返したことで知られていますが、その目的は借金取りから逃げることで落語の世界における現状打破を願ったこととされています。

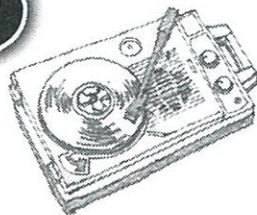
五木ひろしが『よこはま・たそがれ』で再デビューする前、松山まさる↓一条英一↓三谷謙と改名履歴を重ね、当時のベストセラー作家・五木寛之にあやかった4度目の改名でブレイクしたこともよく知られています。同じようにデビュー曲がふるわず芸名を変えて再出発し、華やかな世界へと歩み始めた女性歌手に、黛ジュン(レコードデビューは渡辺順子の名で『ダンケ・シエン』)、夏木マリ(同、中島淳子の名で『小さな恋』)、内田あかり(同、大形久仁子『限りある日を愛に生きて』)、戸田恵子(同、あゆ朱美『ギターをひいてよ』)などがいます。以前に触れた覆面歌手を登場させる背景には、話題性で顧客の関心を

喚起させ売り上げにつなげようとするレコード会社の戦略があるわけですが、歌手個人の改名には、「世に出

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦



たい」「有名になってお金を稼いだ」といった必死な想いが新たな芸名にぎゅっと詰め込まれていました。同じような行き詰まった道の打開策としての改名でも事情はさまざまで、本名を使わずに名前を代えざるを得ないケースには、その時代を反映しているものが少なくありません。明治44年、東京・日本橋の裕福な織物問屋の三男として生まれた増永丈夫は、昭和4年東京音楽学校予科声楽部(現・東京芸大音楽学部)に入學します。しかし、実家の織物問屋が破産、家計を助けるため、禁じられている校外演奏に該当するレコード吹き込みのアルバイトを始めます。そのときに隠れ蓑として使った芸名は、「日本一と富士山」にちなんだ

ものでした。世界恐慌から端を発し、昭和5年から始まった昭和恐慌の影響は、増永の人生を一変させることになりましたが、幸いにも、多くの日本人に歌謡曲という娯楽を与えてくれた「藤山一郎」を誕生させることになりました。

また、昭和14年には「ブルースの女王」として歌謡界を席巻していた淡谷のり子が、服部良一のタンゴ調作品『夜のプラットホーム』(詞・奥野椰子夫)を吹き込みますが、時にそぐわないという理由で発売禁止になります。

一計を案じた服部は、2年後、歌詞を英語に直し、曲名も『I Will Be Waiting (待ち侘びて)』と変え、日独混血の男性に歌わせることで洋盤を装いコロムビアの洋楽部から発売、狙い通りのヒットに結び付けました。そのとき作者としてレコード盤に記されていた名前は「Hatter & Maxwell」。もちろん「Hatter」とは服部自身のことを指したものです。英語を使った妙案が開戦前の日本人の心を癒し、志ん生が満洲から帰還した昭和22年、同曲は二葉あき子の歌で日本語の歌詞が甦ることになりました。